



木下 道郎 | ドッグハウス [2005年]

Michio Kinoshita | Dog House

中村好文—イラストも

Yoshifumi Nakamura

黄昏どきに屋外で呑むワインは格別。木下さんの膝の上にいるのがハヤちゃん(パピヨン)、手前にいるのがフクちゃん(ラブラドル)



数年前、同じ大学で設計を教えている木下道郎さんから「自宅が完成したので、よかつたら見に行っちゃいませんか?」と誘っていたことがあります。

いつもなら間髪を入れず「行きます、行きます」というところですが、そのときは、なぜかそのふたつ返事が出ず、せっかくのお誘いなのに見学の機会を逸してしまいました。じつをいうと、すぐに返事できなかったのは、新築直後のまっさらな家を訪問することに少々戸惑いを覚えたからでした。

これはうしろ向きの理由ですが、前向きに言えば、私には「新しい家が木下さん一家によって十分に住み込まれ、そこここに生活の匂いが染みこんだところに見学させてもらいたい…」という気持ちが、そのときははっきりありました。少し大きさにいうと、この気持ちの中に私の「住宅観」が正直にあらわれています。すなわち、住宅は、なにをいってもそこで営まれる暮らしのための「容器」であるべきだ

という「思いこみ」(これを「思想」と呼んでもよいかもしれません)です。その容器が、そこで営まれる暮らしにふさわしいかどうか? そして、そこで暮らす家族が、背伸びもせず、萎縮もせず、遠慮もせず、我慢もせず、自然体で伸び伸びと暮らしているかどうか? そういうことが私はとても気になります。そして、その様子を見るためには、少なくとも、2、3年は住み込まれたころが良いと思うのです。

「ドッグハウス」は三鷹市の閑静な住宅街にあります。あたりに大きな樹木の生い茂る武蔵野の面影の残る素晴らしい住環境です。最寄りの駅からほとんど車の通らないまっすぐな一本道を、左右に並ぶそれぞれに特徴のある家々を品定めしつつ歩くこと数分で、「ドッグハウス」の前に辿り着きます。板塀の上に大小の三角定規を向かい合わせに立てたような特徴的な外観。板塀のほぼ真ん中が四角く削りぬかれて、その向こうにもうひとつ別の板塀が見えています。外観は見るからに建築家が設計した家という感じが、「これ見よがし」の嫌味な感じはまったくありません。平屋なのでスケールが大きすぎず、建物が威張っていないことと、外観がちょっと「とほけた顔」をしているせいかも知れません。見ようによっては左右の三角屋根が犬の耳のようにも見えますが、実際にはこの形は中庭への日照を確保し、中庭側から見たときに南側と北側の隣家を



居間棟と寝室棟に挟まれた中庭空間。三角屋根のおかげで庭の日照が確保されている様子が分かる

視界から消すために生まれた形です。先ほど板塀の穴から向こう側の板塀が見えていると書きましたが、この二枚の板塀の隙間が道路との緩衝スペースになっており、玄関扉はちょっと物陰に隠れる感じで慎まげにこの隙間にはめ込まれていました。

玄関のドアを開けるやいなや、この家の主役である小型犬が甲高い鳴き声とともに出迎えてくれました。私は犬の種類とその名前については、とんと疎いのですが、この小犬はパピヨンという種類だそうです(左右にピンと張った大きな耳の形が建物のファサードによく似ています)。そしてそのうしろから、この家のもう一匹の主役であるラブラドルが、のっそりと現れて「やあ、よくきたね」という感じで私の顔を見上げたあと、胴体を丁寧に私の脚にこすりつけて歓迎してくれました。この行動は人間で言えば出迎えた人をハグする感じなのでしょうね。そして、その背後に笑顔の木下道郎さん。こちらは、顔の下半分をU字型に取り巻いている「毛並み」に特徴があります。言い忘れましたが、この家には猫も同居していますが、人見知りする性格らしく、とうとうその姿を見せてくれませんでした。

ここで簡単に平面構成の説明をしておきましょう。

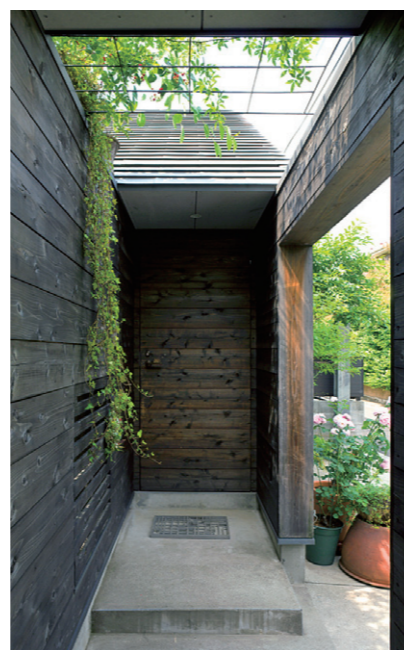
平面図をご覧いただくとお分かりのように、「ドッグハウス」は「居間棟」と「寝室棟」が東西に細長い中庭を挟む形で「川の字型」に並列されています。外観で説明した左右の三角形の部分が寝室棟と居

間棟、あいだの水平の板塀部分が中庭にあたります。

玄関から足を踏み入れた天井の高い部屋が、居間、食堂、台所からなる家族の集う居間棟。外観で見た三角屋根の形がそのまま天井の形になって表れています。急傾斜の天井がダイナミックな空間を生み出しており、北側の大きな壁面にはシナ合板が張られていて温かい雰囲気を出していました。一方、中庭に面した開口部は2メートルほどに抑えられているので、室内は大らかな密閉感に包まれています。居間、食堂を見渡すと、要所要所に置かれたモダンデザインの家具に混じってヨーガン・レールのエスニック趣味のストूलがバラバラと配されて、なかなかいい雰囲気を出していました。ここで玄関から居間に入る前に右手にチラリと見える廊下状のスペースのことを書いておかななくてはなりません。廊下から右手に延びる奥行き一間半のこの細長い廊下には、左手にCD用の棚、右手に本棚が造り付けられており、それぞれにピシッリCDと本が収められています。そしてそれがじつに几帳面に並べられているのです。棚に整然と並んだCDを眺めていて、私は、以前、木下さん自身から聞いた次のような話を思い出していました。木下さんは子供のころからものごとをきちんとなしと気のない性格だったそうです。たとえば、自分の買ってもらった30色とか50色とかいう色鉛筆セットを自分以外の人が使い、使った色鉛筆を順序を無視してグチャグチャに戻されるのが嫌で嫌でたまらず、「泣きながら」一本、



1— 道路側からの外観。三角定規を向かい合わせに立てたような立面が特徴的 | 2— 板塀に穿たれた穴の右手奥に玄関がある



一本、色相の順序通りに元に戻していたというのです。
 いつか私が映画監督になり「建築家・木下道郎物語」という映画を撮る機会があったら、木下少年を紹介するエピソードとしてぜひとも取り入れたい話です。
 さて、その見事に整理されたCD棚を見ているうちに、この整然とした棚から5、6枚抜き出して、ところかまわず戻しておいたらどうなるかなあ…という悪戯心がむくむく湧いてきましたが、もちろん、そんなことはしませんでした。

いよいよこの家の最大の見どころの中庭です。先ほど書いたとおり、この中庭は居間棟と寝室棟に挟まれた短冊状の空間で、大きさは幅3メートルちょっと、長さは13メートル60センチほどです。床は木製のスノコ張り、屋内の床とゾロ(同一平面)に仕上げられているので、空間の繋がり方は「縁側的」と言っても良いと思います。中庭と書きましたが、木下さん一家はこの場所を外部の居間として存分に活用しているようです。また、平面図を見ると、この中庭が動線的には廊下の役割をしていることがわかります。たとえば、それぞれの寝室からトイレに行くにも、浴室に行くにも、必ずこの中庭を通ることになるのです(「住吉の長屋」と同じで、雨の日は傘をさして行くことになりますが…)。

中庭には植栽のスペースも十分に確保されていて、ジュンベリーやレモン、それにシマトネリコなどの木が植えられているほか、植木鉢が置かれたり軒先から吊るされたりして、緑豊かな気持ちの良い外部空間になっています。

嬉しいことに、私の到着する前から中庭にはワインとオードブルが用意されていました。ワインを飲みながら雑談に花を咲かせようという木下さんの心遣いです。夕暮れを待ちながら屋外でチビリチビリ飲むのは「呑み助」にとっては至福の時間。「黄昏」という言葉と「アペリティフ」という言葉が背中合わせに感じられるのは、こうしたお膳立てが揃った時なのです。

「最初は白で、キリリといきましょう!、今日はかくかくしかじかのワインを用意しました…」ワインにも一家言ある木下さんによる今日のワインについての方針演説(?)を合図に、取材は「見学取材」から「中庭空間における飲酒体験取材」にゆるやかに移行しました。

「ドッグハウス」は、中庭に面して居間棟に6ヶ所、寝室棟に6ヶ所、合計12ヶ所の出入口がありますが、ワインも進み、そろそろ2本目を開けようというところ、寝室棟の律儀に4つ並んだ個室のひとつから、ひょっこり高校生のお嬢さんが出てきました。寝室棟に人の気配を



3

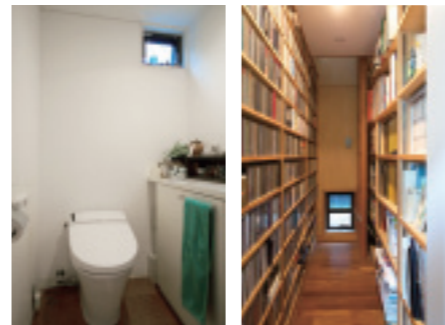
3— ロフトから見おろす居間と食堂。「大らかな密閉感」という言葉、納得いただけましたか? | 4— 居間の東側に天井高を利用したロフトが設けられている
 5— 食堂から中庭方向を見る。居間棟の開口部もすべて引き戸で建具は壁の中に消えてしまう | 6— コンパクトサイズのトイレ。右上の小窓からテラリと空が見える
 7— 幅約90センチの通路の両側に作られたCD棚と本棚。整理整頓がりに注目!



4

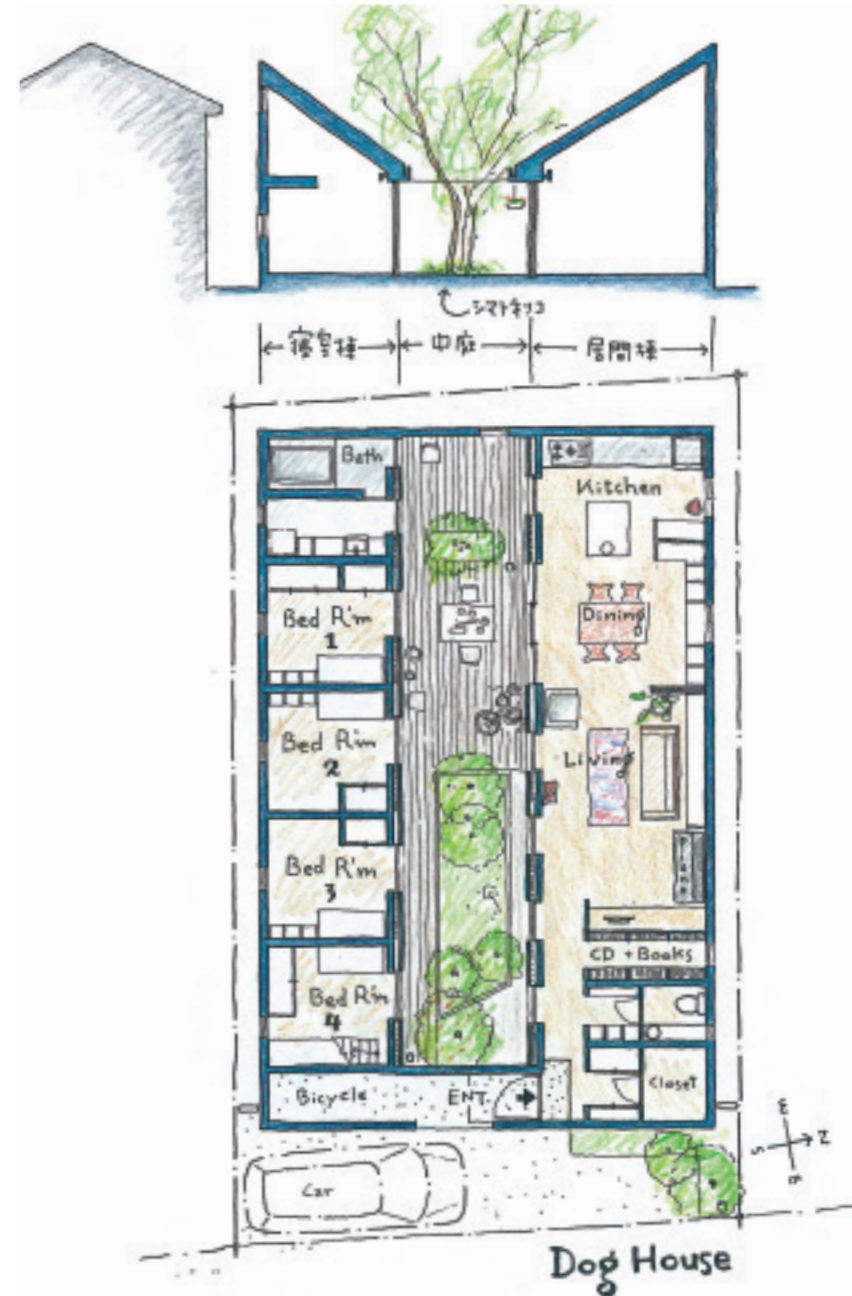


5



6

7



【建築概要】
 名称:ドッグハウス | 所在地:東京都三鷹市 | 家族構成:夫婦+子供2人 | 敷地面積:195.26㎡
 建築面積:94.66㎡ | 延床面積:94.66㎡ | 規模:地上1階 | 構造:木造
 設計:木下道郎/ワークショップ

まったく感じていなかったもので、私はちょっと意表を突かれ、挨拶も忘れて「おや、おや、今まで中にいたんですね!」と言いました。ところが、さらに30分ほど経ったころ、ゴソゴソという音がして、今度は別の戸口から大学生の息子が「出現!」という感じで中庭に出てきました。息子さんもずっと部屋に「潜んで」いたわけです。その二人の登場の感じは、空っぽだと思っていた巣箱から小動物が姿をあらわしたようでした。
 このとき、私は「ドッグハウス」という命名が単なる犬と一緒に住ま

う家という以上に、一種の「巣穴」を意味しているのだと思いました。きっと家族が、めいめい自分の部屋に帰っていくときの後ろ姿は動物が巣穴に戻るような感じにちがいません。「ドッグハウス」は、「住まい」という言葉を「巣まい」と書き換えても、ちっとも違和感がないのです。もちろん、そうした「巣まい」ですから、動物たちを含む木下さん一家が、背伸びもせず、萎縮もせず、遠慮もせず、我慢もせず、自然体で伸び伸びと暮らしていることは、あらためて申し上げるまでもありません。

なかむら・よしふみ—建築家/1948年生まれ。

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。

主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT[2001]、伊丹十三記念館[2007]など。

主な著書:「住宅巡礼」[新潮社/2000]、「意中の建築 上・下」[新潮社/2005]、「Come on-a my house すまいる風景 Environments for living」[ラトルズ/2009]など。